

○事業所名	中野区立療育センターアポロ園 児童発達支援事業		
○保護者評価実施期間	2025年10月30日 00:00 ~ 2025年11月29日 23:55		
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	433	(回答者数) 109
○従業者評価実施期間	2025年10月15日 00:00 ~ 2025年10月30日 23:55		
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	38	(回答者数) 38
○事業者向け自己評価表作成日	2026年 3月 18日		

○ 分析結果

	事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	多職種が連携してこどもの特性や発達段階を丁寧に理解し、アセスメントやモニタリングを通して児童発達支援計画に反映しながら、計画に沿った一貫した支援を提供する体制が整っている。	多職種が連携してこどもの特性や発達段階を丁寧に把握するため、内容を職員間で共有し、専門職それぞれの視点から得られた情報を療育に反映するほか、支援前後の打合せでその日の重点ポイントや役割分担を確認し、声かけや支援方法が統一されるよう意識的に調整している。	アセスメント記録や計画理解の標準化、計画内容の読み合わせの機会の確保、モニタリング結果の迅速な反映などを進め、より計画的で質の高い支援体制の充実を図っていく。
2	こどものその日の状態に合わせた柔軟な活動調整や、清潔で心地よい環境づくり、個別スペースの活用などにより、こどもが安心して通所でき、楽しみにできる場が維持されている。	状況に合わせて活動量や関わり方を細かく調整し、一人一人の認知面や感覚面にも配慮した環境整備を行うとともに、気持ちの切り替えや集中が必要な場面ではそれを速やかに察知するなど、ご家庭が安心して過ごせるための具体的な工夫を日常的に実施している。	個別スペースの利用基準の統一や環境調整のルール化、集団・個別活動のゾーニング改善、共感的支援のスキル向上などを進め、どの家庭にも均質で安定した支援を提供できる体制を整えていく。
3	季節感や興味を取り入れた活動プログラムの工夫や、プログラムの固定化を防ぐ取り組み、視覚的構造化や動線の工夫など、こどもの理解しやすさと発達段階に応じた環境調整が継続的に行われている。	活動内容を細かくアレンジし、同じねらいのプログラムでも道具・展開・難易度を変えることでマンネリ化を防ぎ、活動の流れが見通せるよう視覚的な手順カードや写真提示を活用しながら調整するなど、こどもが理解しやすく安心して参加できる環境づくりを意識している。	新しい活動案の蓄積・共有の仕組みづくり、活動記録の体系化、視覚支援・音声支援ツールの拡充などを進め、より多様で質の高い活動提供につなげていく。
	事業所の弱み(※)だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	アセスメント記録や個別スペースの利用基準、計画理解などの標準化が不十分で、研修内容の共有や実践への落とし込みが弱く、不慣れな職員へのフォロー体制も属人的であることから、職員間の支援力や実践にばらつきが生じている。	アセスメント記録の書き方や個別スペースの利用基準、計画内容の理解度に職員間で差があり、統一的な基準や手順が十分に整備されていないことに加え、研修で得た知識が組織全体に共有されにくく実践に反映されづらいこと、さらに不慣れな職員へのサポートが個々の経験や裁量に依存していることが、支援の質にばらつきが生じる主な要因となっている。	記録・計画・環境調整の標準化マニュアル整備、研修後の共有会や実践振り返りの場の設定、OJT体制の明確化、改善点を実践に落とし込むフォローアップ体制の構築が必要である。
2	支援前後の打合せや会議内容の記録化が不十分で情報が属人的になりやすく、関係機関との連携方法にも統一性がなく、情報発信の頻度や内容にばらつきがあるなど、情報共有・連携の仕組みが十分に整備されていない。	支援前後の打合せ等が記録として残らず担当者の経験や判断に依存して情報が共有されていること、関係機関との連携方法について統一的な手順が確立されていないことなどが、情報共有・連携の仕組みが十分に整わない主な要因となっている。	情報共有ルールの整備、連携履歴の管理方法の統一、情報発信の年間計画の作成、相談対応の記録・分析・改善サイクルの導入が必要である。
3	地域交流や家族支援プログラム、スーパーバイズの実施が単発的で継続性が弱く、家族支援の参加しやすさやきょうだい支援の機会も十分に確保できていないなど、地域連携・家族支援・外部資源活用の体制が十分に整っていない。	地域交流や家族支援プログラムが単発的で継続性が弱く、参加しやすい時間帯や形式の工夫が不足していること、きょうだい支援や保護者交流の機会が十分に確保できていないこと、スーパーバイズの依頼が不定期であることが課題の背景にある。	地域交流や家族支援の年間スケジュール化、オンライン化や時間帯の多様化、きょうだい支援の企画、保護者交流の継続的実施、スーパーバイズの定期依頼体制の構築が必要である。